②

令和８年度
地域循環共生圏づくり支援体制構築事業
中間共有会

活動団体の本事業での活動テーマ

『サスティナブルツーリズムを取り入れた
滞在型観光の促進ー環境・観光・子育て
教育・定住を統合した取り組み』

活動団体の活動地域：北海道豊富町
活動団体名　　：豊富町観光協会
中間支援主体名　　：北海学園大学

１．中間支援主体のありたい姿

■中間支援主体としての本事業を通じた獲得目標とそのための具体的なアクション

大学が中間支援者として提供できる機能は、1）大学教員がもつ専門性やノウハウを地域社会に提供すること、2）地域社会とのコーディネートや橋渡し役を担うこと、3）大学生（北海学園大学など）を派遣し地域体験へ従事させること、4）大学生を将来の中間支援者に育成することの4つを考えている。

今年度の活動では、昨年度までの経験を活かして、1-3)の機能をより効率的・効果的な成果が出せるように内容を改善させていく。4）については、大学で体系的な教育プログラムを開発するように北海学園大学内で検討を進める。

■中間支援主体としての本事業終了後の地域づくりへの貢献

中間支援主体としては、上記の4つの機能を獲得し、大学の特性を活かして地域づくりへ貢献していきたいと考えている。

本事業に関わる専門性はオーダーメイドで対応する必要があるため、関連の先進例の調査によるノウハウを蓄積し、実践的な知見の提供を目指す。また、大学生が、中間支援者を現場で担えるように教育・指導し、未来の中間支援者を養成していく人材育成プログラム開発を目指す。

この事業を通じて中間支援機能を獲得し、豊富町で研究と大学教育の実践の場として継続的にサポートしていく。そして、地域資源を活かした地域課題の解決、人をつなぐ役割を他の自治体でも実施し、地域循環共生圏づくりに貢献していく。

2．中間支援主体の支援・取組計画【R8当初計画】

■中間支援主体の1年間の支援目標

活動団体の豊富町観光協会は、適切な支援を得られると、異分野の教育・子育ての要素を絡めて滞在型観光の活動を拡げていく可能性を有している。今年度も「ワクワクとよとみ未来会議」や「大学生の地域インターンシップ」を継続し、ワークショップや打合せなどで、住民や関係者と意見交換・交流して、地域で解決すべき課題や要望を抽出し、企画立案を支援していく。1年後には、地域活動への参画や交流等を行う「サスティナブルツーリズムを取り入れた滞在型観光」の事業を具体化させることを目指す。

■支援計画

	活動団体の取組における現状と課題（見立て）	課題を解決するために必要と考える手段（打ち手）
①	本事業に関わる担い手は町内に「点の状態」として多数存在している。課題は「面の状態」に拡張するための仲間づくりであり、まずは率直な意見交換の場を設定し、プラットフォームを形成していくことが必要である。	「ワクワクとよとみ未来会議」を今年度も継続して実施していく。大学教員などが学習会やワークショップで必要な知識や情報を専門的な知見を提供する。また、「未来会議」では、参加者間の意見交換を円滑に進めるために、ファシリテートを行う。
②	地域には大学がないため、日常で大学生がいない。地域社会が、若者の発想や感性、よそ者の意見を取り入れることで、新たな刺激を生む可能性がある。とくに、大学生が交流することで、子どもたちの視野が拡がり、物事の発想が豊かになる可能性がある。	昨年度と同様に、夏休みの時期に大学生の「地域インターンシップ」を実施していく。豊富町の主産業・生活・教育について体験し、若者の感性を活かした多種多様な観点からアイデアを生み出し、地域づくりへ活かしていく。
③	地域活動への参画や交流等を行う「サスティナブルツーリズムを取り入れた滞在型観光」の事業のタネを具体化し、ローカルSDGs事業を創出する必要がある。	―昨年度の「ワクワクとよとみ未来会議」で出されたアイディアを活かして、「テントサウナイベント」を開催する。地域の主体と大学生が協働することで、新たな事業のタネを見つけ、事業の創出につなげていく。

3．中間支援のふりかえり

■ 3か年を通じた中間支援のふりかえり

地域循環共生圏づくりの過程の支援を通じた「気づき（中間支援が機能したポイント等）」「新たに認識した課題や悩み」「中間支援主体自身の変化（意識や視点、技術等）」「今後の地域づくりの構想や地域外との関係者との連携方策」 等についてご記入ください。

- 「ワクワクとよとみ未来会議」「ワクワクとよとみ未来ワークショップ」では、大学生が参加者の意見交換を促すファシリテーターを務めて、将来の中間支援者を育成できた。中間支援者の育成は、正規の大学教育でなくても、高い水準で実施できることが確認された。
- 大学生のアイディアコンテスト前に、事前学習会を先輩大学生が企画運営したことで、目的が明確となり、地域との関係性を広げることができた。とくに大学教員の発想ではなく、若い大学生の感覚が地域交流の裾野を広げる可能性に気がついた。
- テントサウナの事業化を目指してきたが、温泉事業者に関心をもってもらうことで、今後のローカルSDGs事業の実装化の可能性が出てきた。
- 大学生は4年で卒業していくので、中心的なメンバーを継続的に確保していくことが難しい。教員からの呼びかけよりも、学生からの声がけの方がメンバー集めでは確度が高いように思う。
- 地元での参加メンバーは確実に増えてきたが、今後どのようにプラットフォームを維持していくのかが課題である。また、自主・自発的な取組を進めていく上で、役場との関わり方、距離感の難しさを感じている。